

近世名古屋書肆の営業展開

The Business Development of Publication and Sales in Nagoya Region in Edo Era

岸野 俊彦(音楽学部教養部会)

はじめに

近世名古屋城下の本屋については、太田正弘『尾張出版文化史』(六甲出版)が三十三軒ほどの本屋の概要を明らかにしている。また、岸雅裕『尾張の書林と出版』(青裳堂書店)は、明治五年『名古屋県管内蔵板箇所取調書』の翻刻や、種々の史料を総合し、「江戸時代尾州書林書肆別出版書目収攬」を作成し、現時点での近世名古屋の本屋別の出版書目を明らかにしている。しかし、書籍は刊行しただけでは、本屋の経営は成り立たない。本が実際に売れて、経費と利益分の回収が不可欠である。こうした視点から本稿では、本を購入した側に残った本屋関係の史料を集積することによって、本屋が、名古屋城下に店を構えるだけでなく、尾張・三河・飛騨・信濃・奥州等の広域に営業活動をしてきた実態を明らかにしたい。但し、残された史料には、購入したり、借りたりした本の書目と値段が記されており、これを明らかにし、所蔵された蔵書や蔵書目録と照合することが必要である。本稿では、紙幅の関係で、これらの作業は別に明らかにすることとし、とりあえず、確認できた史料の表題と本屋の名前から、その営業地域の広がりを明らかにすることに限定す

る。尚、本稿で史料表題をあげた史料の一部は、『愛知県史』資料編「尾西・尾北」「西三河」「学芸」に翻刻している。また、史料や所蔵者については、注記しない限り、関係資料編の「解説」、及び「史料群解説」によっている。

一 尾張における名古屋書肆の営業実態

尾張で調査し、名古屋書肆の営業実態を示す史料が確認できたのは、今のところ弥富市服部家、一宮市吉田家、稲沢市野口家、稲沢市岩田家、名古屋鳴海下郷家の五家である。以下、この五家の概要について明らかにしたい。

(一) 海西郡(現弥富市)、服部家

服部弥兵衛家は海西郡荷之上村(現弥富市)の庄屋や津島祭の市江車取締役などを勤め、苗字・帯刀を許された豪農である。服部家には文化十四年(一八一七)六月に服部家八代凱が所蔵書を整理して記録した「服部氏蔵書目録」(県史尾西・尾北所収)がある。総計四百十部が、分類されて記録され、書名の下に「祐」「枳」「凱」と、集書者が記されている。「祐」は六代正慶、俳諧を嗜み「祐意坊」

「流之仙」等の俳号を持った。「枳」は七代正郷で「枳戎」と号した。八代凱は文政元年（一八一八）に家督を相続し、安政二年（一八五五）に死去した。「名張舎」「元伯」と称し、尾張藩校明倫堂の恩田仲任、秦鼎、秦寿太郎、鈴木胤に儒学や国学を学んだ。凱はこの目録作成後も多くの書籍を収集しており、九代續（逸三郎）も明倫堂の秦寿太郎や植松茂岳に儒学や国学を学び、やはり多くの書籍を収集した。その多くは服部家に現存している。服部家文書中、名古屋書肆との取引の確認できる史料表題は、以下のものである。

- ① 「丑七月八日、服部弥兵衛宛永楽屋東四郎覚書」（県史尾西・尾北収録）
- ② 「うし極月、服部弥兵衛宛永らくや東四郎覚書」
- ③ 「午十二月廿四日、服部清治宛永楽屋東四郎覚書」
- ④ 「丑極月廿四日、服部弥兵衛宛大野屋惣八覚書」（県史尾西・尾北収録）
- ⑤ 「午七月、服部弥兵衛宛大野屋惣八覚書」
- ⑥ 「丑六月、服部弥兵衛宛大野屋惣八覚書」
- ⑦ 「午六月十八日、服部弥兵衛宛本屋清七覚書」
- ⑧ 「子七月十二日、服部弥兵衛宛本や治兵衛覚書」
- ⑨ 「午十二月廿四日、服部弥兵衛宛東月堂幸八表具代覚書」（県史尾西・尾北収録）

服部家と取引した書肆は、①永楽屋東四郎②本屋清七③本屋治兵衛④大野屋惣八（貸本）の四書肆である。また、服部家には、多くの書画が所蔵され「書画目録」も残されている。こうした書画の表装は、名古屋の表具師東月堂幸八が行っている。

（二）中島郡（現一宮市）、吉田家

吉田家は中島郡小信中島村（現一宮市）の庄屋・年寄・留木裁許人を勤めた。経営的には、農業経営の他、綿木綿を大量に京・大坂で販売した。九代吉田世良（茂右衛門）は、「月窓」「高遠」の号で漢詩・俳諧・和歌を嗜んだ。吉田家文書中、名古屋書肆との取引が確認できる史料表題は以下のものである。

- ① 「九月五日、吉田世良宛菱屋藤兵衛覚書」（県史尾西・尾北収録）
- ② 「十一月二十八日、上（吉田）宛永楽屋佐助覚書」
- ③ 「二月二十三日、上宛永楽屋東四郎覚書」
- ④ 「二月二十四日、上宛永楽屋東四郎覚書」
- ⑤ 「十一月七日、上宛菱屋久八覚書」

吉田家と取引した書肆は、①永楽屋東四郎②菱屋藤兵衛③永楽屋佐助④菱屋久八の四書肆である。

（三）中島郡（現稲沢市）、野口家

野口善兵衛家は、中島郡三宅村（現稲沢市）の庄屋を歴任した。三宅村は、尾張藩付家老成瀬家（三万五千石）の一円給地で概高千四百石余の大村である。野口家は、織田信長の傳（守役）平手氏ゆかりの家柄で、土着し土地開墾を進めたという由緒を持つ。野口家文書で確認できた名古屋書肆史料表題は

- ① 「巳七月、野口善兵衛宛本屋仙三郎覚書」（県史学芸所収）
- ② 「明治二巳年、本仙三借本之覚」（県史学芸所収）である。

以上から、野口家で確認できる書肆は本屋仙三郎（貸本）である。

（四）中島郡（現稲沢市）、岩田家

岩田家は、中島郡野田村（現稲沢市）の豪農・大地主である。幕末期には所持高は百石を越えていた。野田村の支配給人は、横井伊折介家（尾張藩四千石）であった。岩田家は、横井家への多額の融

資などもあって、横井家家臣となり、横井家用人役や家老役を勤めた。岩田家文書で確認できる史料表題は「五月九日、岩田御屋敷宛永楽屋東四郎覚書」（県史学芸所収）であり、永楽屋東四郎との取引が確認できる。

(五) 鳴海（現名古屋市） 下郷家

下郷家は、鳴海の酒造・新田経常等で財をなした富豪である。二代吉親は、俳号知足と称し、松尾芭蕉門の俳人である。三代季雄（勘右衛門・次郎八）は、俳号蝶羽と号した。四代元雄（次郎八）は俳号亀世と号した。五代昌雄（次郎八）は、俳号常和と称し、横井也右門の俳人である。六代寛（仙蔵、才右衛門、次郎八）は、学海と号し、書画、和歌、俳諧等を嗜んだ。安永四年（一七七五）に著書『尚書去病』を風月堂孫助・藤屋吉兵衛等から刊行し、寛政二年（一七九〇）に四十九才で死去している。七代景雄（次郎八、勘左衛門）は、伝芳と号し、文政二年（一八一九）に五十八才で死去した。八代孝男（次郎八）は丹山と号し、文政六年に三十四才で死去している。九代道雄（寿輔、次郎八）は此汐と号した。十代邦雄（次郎八、次郎八）は、采蘭と号し画家として著名で、明治三十三年に死去している。

下郷家文書（市政資料館）で確認できる史料表題は、以下のものである。

- ① 「二月六日下郷仙蔵宛風月孫助」（県史学芸所収）
 - ② 「四月二十一日下郷次郎八、同才右衛門宛永楽屋東四郎」（同）
 - ③ 「四月二十一日 覚 永楽屋東四郎」（同）
 - ④ 「十二月十四日 御上様宛藤屋吉兵衛」（同）
- 下郷文書（名古屋市博）で確認できるものは、以下のものである。

- ① 「十二月十一日、下郷千蔵宛風月孫助」
- ② 「八月廿二日、千代倉宛慶雲堂東平」

また、大谷篤蔵・長友千代治編『下郷仙蔵宛風月堂孫助書簡』（文化財叢書第七十七号）は、愛知県立大学附属図書館所蔵の六代仙蔵宛風月堂孫助書簡九十五通を翻刻紹介している。

以上から、下郷家と取引したのは、①風月堂孫助②永楽屋東四郎③藤屋吉兵衛④慶雲堂東平の四書肆であることが確認できる。

(六) 尾張の名古屋書肆

以上、尾張での営業を確認できる書肆を整理しておく。

（現弥富市、服部家）

- ①永楽屋東四郎②本屋清七③本屋治兵衛④大野屋惣八（貸本）の四書肆。

①書画の表装は、名古屋の表具師東月堂幸八。

（現一宮市、吉田家）

- ①永楽屋東四郎②菱屋藤兵衛③永楽屋佐助④菱屋久八の四書肆。（現稲沢市、野口家）

①本屋仙三郎。

（現稲沢市、岩田家）

①永楽屋東四郎。

（現名古屋市、下郷家）

- ①風月堂孫助②永楽屋東四郎③藤屋吉兵衛④慶雲堂東平の四書肆。

以上、調査し史料が確認できた五家は、いずれも豪農・豪商で、種々の文化活動を行っており、蔵書も多かったと思われる。名古屋書肆は、こうした家に営業に入り、複数の書肆の競合状態であったことが理解できる。確認はできなかったが、野口家や岩田家にも複数の

書肆が出入りしたと思われる。

尾張の五家への営業が確認できる書肆は、①永楽屋東四郎②大野屋惣八(貸本)③本屋清七④本屋治兵衛⑤菱屋藤兵衛⑥永楽屋佐助⑦菱屋久八⑧本屋仙三郎(貸本)⑨風月堂孫助⑩藤屋吉兵衛⑪慶雲堂東平の十一書肆にのぼり、書画の表装では、名古屋の表具師の東月堂幸八が関わっていた。

二 三河における名古屋書肆の営業実態

三河で名古屋書肆の営業が確認できる史料は、今のところ豊田市村上家、刈谷市太田家、豊田市足助小出家、豊橋市松坂家である。以下、この四家を中心に概要を明らかにする。

(一) 刈谷藩医、国学者村上忠順(現豊田市)と名古屋書肆

村上忠順は、文化九年(一八一二)村上忠幹の次男として三河国碧海郡堤村(現豊田市)に生まれた。文政十二年(一八二九)六月から同十三年十月まで、名古屋の加藤敬順に医学(内治学)を学び、天保元年(一八三〇)帰郷、十二月から堤村で開業した。名をはじめ賢次(賢二)後忠順、字を承卿、号を蓬廬と称した。名古屋遊学の間に、万葉集を秦鼎に、古事記を植松茂岳に学び、嘉永二年(一八四九)に本居内遠に入門している。嘉永六年四月、刈谷藩医であった父玄意(忠幹)の死去により家督を継ぎ、六月、三人扶持金八両、御小納戸格表医師となった。安政二年(一八五五)正月から三河国福田村の酒井玄悦、同敬蔵に眼科を学んだ。この間、刈谷藩主土井利善に論語・孝経・老莊・孫子・源氏物語等を講じた。忠順は、古典の研究・注釈につとめ、多くの書物を収集して、収蔵するための文庫を設けた。これを「千卷舎」と名付た。二万五千

冊余が収蔵され、現在は刈谷市中央図書館内の村上文庫となっている。

こうした書物の上に忠順は、『古事記』(明治七年深見藤十蔵板、発行書肆、三河八丁村近藤巴太郎、同新堀村深見藤吉)『祝詞』『古語拾遺』(明治十年、深見藤十蔵板)『万葉集』『金玉集』『散木弄歌集』『和名抄』等の標注を行い、また『名所栞』『神号略記』(明治七年、尾張慶雲堂発兌)『社号一覽』『三則啓蒙』『雅語訳解』『拾遺諭草』の著述、『玉藻集』(初編和歌山坂本屋喜一郎刊、二編永楽屋東四郎刊)『管藻集』『河藻集』(文久二年序、松嶋亭、晴月堂蔵板)『嵯峨野集』『元治元年千首』(慶応二年序、松嶋亭蔵板)等の和歌集の編集刊行をした。医師としては『薬品識名』『腫瘡方論』等を著した。刊行著書の蔵板主に「深見藤十」「松嶋亭」とあるのは、三河碧海郡新堀村(現岡崎市)の木綿問屋の富商深見藤十篤慶である。深見一統は、三河最大の木綿問屋・木綿仲買を営なみ、領主である沼津藩水野氏の御用達を勤めた。篤慶は、村上忠順に国学を学び、忠順の娘愛子を妻とした。このため、忠順の著書の刊行や書籍購入のための資金援助をした。以下の史料は、その一端を示している。

覚

名古屋御買付メ高

一 金六拾九両貳分式朱ト式文 本代并休泊共

内金三拾五両也 先達而明司殿江相渡分

引メ金三拾四両貳分式朱ト式分

右之通差上候間、御改御請取可被下候、以上

西十月二十八日

深藤

村上大人

「深藤」は、深見藤十、「村上大人」は村上忠順、「明司殿」は、忠順の次男の村上忠明である。名古屋での書物購入費用として、六十九両余の大金を深見篤慶は忠順に提供している。

村上家史料から確認できる名古屋書肆との関係史料の表題は以下のものである。

- ① 「戊二月二十二日、村上大先生宛永楽屋東四郎」
- ② 「十一月晦日、村上先生宛永楽屋東四郎」(県史学芸所収)
- ③ 「四月晦日、村上承卿宛永楽屋東四郎」(同)
- ④ 「寅極月、村上承卿宛永楽屋東四郎」
- ⑤ 「二月三日、村上先生宛永楽屋東四郎」(県史学芸所収)
- ⑥ 「正月十四日、村上宛永楽屋東四郎」
- ⑦ 「六月朔日、村上宛菱屋藤兵衛」(県史学芸所収)
- ⑧ 「六月朔日、村上宛菱屋藤兵衛」(同)
- ⑨ 「申七月、村上承卿宛美濃屋清七」(同)
- ⑩ 「二月二十一日、上(村上)宛松花堂」(同)
- ⑪ 「八月二十四日、村上賢二宛本屋伊六」(加藤敬順に従学中)
- ⑫ 「七月二十四日、小西和助宛本屋伊六」
- ⑬ 「辰二月二十八日、村上承卿宛本屋伊六」(県史学芸所収)
- ⑭ 「寅七月、村上承卿宛本屋伊六」
- ⑮ 「六月十日、村上承卿宛美のや伊六」(県史学芸所収)
- ⑯ 「壬辰(天保三) 正月五日、村上承卿宛本や伊六」
- ⑰ 「壬辰六月三日、村上承卿宛本や伊六」
- ⑱ 「壬辰正月二十八日村上承卿宛みのや伊六」
- ⑲ 「壬辰三月十二日、みのや伊六」
- ⑳ 「辛卯(天保二) 極月、村上承卿宛本や伊六」

⑳ 「辰七月、村上承卿宛みのや伊六」

㉑ 「丑極月、加藤様御内村上賢二宛本や伊六」(加藤敬順に従学中)

㉒ 「三月二十六日、村上宛皓月堂文助」(県史学芸所収)

以上、村上家と取引を確認できる名古屋書肆は①永楽屋東四郎②菱屋藤兵衛③美濃屋清七④松花堂⑤美濃屋伊六⑥皓月堂文助の六書肆である。

(二) 刈谷藩御用達太田平右衛門家(現刈谷市)と名古屋書肆

刈谷太田平右衛門家は、織田信孝の旧臣で、承応四年(一六五五)に知多郡から刈谷に移住した。刈谷藩は、諸大名家が入転封したが、延享四年(一七四七)土井利信が西尾から移り、以後廢藩置県まで、二万三千石の土井氏支配が続いた。太田平右衛門家は、代々庄屋役を勤め、元禄期には酒造を営んでいた。宝永五年(一七〇七)年には酒造を休業して油問屋専業となり、土井氏の前の藩主三浦氏時代の享保十六年(一七三一)年から苗字御免となっていた。土井氏時代の天明・寛政期に藩の御用商人として名をあげた。十一代平右衛門正行は、文化五年(一八〇八)に西尾の辻氏からの養子である。号を蒼吾といい、文久二年(一八六二)に七十三才で死去している。十二代平右衛門正範は、弘化三年(一八四六)に家督相続し、慶応二年(一八六六)年に四十四才で死去する。この間、天保八年(一八三七)には、正行は「御馬廻り格」正範は「御馬役格」となっている。太田家は、和泉屋の屋号を持つ油問屋であるが、木綿、黒砂糖(薩摩藩)、干鰯、白砂糖等も商い、刈谷藩の外、西尾藩、岡崎藩、吉田藩の払い米を扱っている。

太田家には明治二年九月の「御払書籍調帳」が残されており、太田家の蔵書の概要が理解できる。一番から二百十七番までの番号が

付けられ、それぞれに、書籍名が記されている。総数九百七十種のもので、大量の書籍が所蔵されていた。こうした大量の書籍の購入は、名古屋書肆からもなされた。太田家文書中、名古屋書肆との取引を
確認できる史料表題は、以下のものである。

- ① 「太田宛慶雲堂東平覚書」(県史学芸所収)
 - ② 「丑四月十二日、上(太田)宛本屋伊六覚書」(同)
 - ③ 「四月十二日、上(太田)宛永楽屋東四郎覚書」(同)
 - ④ 「八月二十六日、和泉屋平右衛門宛永楽屋東四郎覚書」(同)
 - ⑤ 「菊月五日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」
 - ⑥ 「菊月四日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」(県史学芸所収)
 - ⑦ 「霜月、太田平右衛門宛永楽屋佐助」(同)
 - ⑧ 「西五月十一日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」(同)
 - ⑨ 「五月二十二日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」
 - ⑩ 「三月二十二日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」
 - ⑪ 「四月十五日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」
 - ⑫ 「霜月十三日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」(県史学芸所収)
 - ⑬ 「菊月十三日、太田平右衛門宛永楽屋佐助」(同)
 - ⑭ 「太田御内おひさ宛吉川弘道(唐本屋勘右衛門売払)」
 - ⑮ 「八月十六日、太田平右衛門宛岡本権四郎」(県史学芸所収)
 - ⑯ 「五月十四日、太田平右衛門宛東月堂幸八」(同)
 - ⑰ 「六月二十五日、平兵衛宛尾頭中書」(同)
 - ⑱ 「懸け物二十幅預け」(同)
- 太田家と取引した書肆は①慶雲堂東平②永楽屋東四郎③永楽屋佐助の三書肆である。その他、名古屋書肆唐本屋勘右衛門の廃業に伴う売払いの斡旋を吉川弘道(不明)が行っている。また、名古屋の

書家尾頭中書が書画の斡旋をしている。太田家には多くの書画も所蔵されていたと思われるが、その表装を名古屋の表具師東月堂幸八が引き受けている。

(三) 三河加茂郡足助村(現、豊田市) 小出家と名古屋書肆

足助の小出権三郎家は、寛文期には酒造を行い、味噌も含めた醸造や塩・木綿・肥料などの流通業、金融業を通じて経営を拡大し、足助を代表する商人となった。安永期以降、領主である足助陣屋旗本本多氏の勝手方を担い、士分格を得た外、矢作川河口部の新田経営にも参入している。権三郎家の分家小出権右衛門(油屋)は、天保期前後に本多氏の三河知行所二十七ヶ村を束ねる大庄屋を二十余年にわたって勤めた。足助は、岡崎の鶴田卓池や刈谷の中島秋挙に学んだ板倉塞馬(池田屋七右衛門、金物・醬油・味噌)を中心に俳諧が盛んであった。分家権右衛門は「蘭所」の俳号を持ち、塞馬とともに足助俳諧を担った。

小出家の蔵書目録は、確認できないが、「道具類書上」の中に百三十四部四百一冊の書籍が本箱ごとに記録されている。

小出家文書中、名古屋書肆との関係がわかる史料は永楽屋東四郎、本屋久兵衛を中心に多く残されているので、以下、代表的な史料表題を撰定列記する。

- ① 「天保四年七月九日、本屋久兵衛宛足助小出権三郎覚書」(県史西三河所収)
- ② 「天保四年八月廿九日、足助小出権三郎宛本屋久兵衛書状」(県史西三河所収)
- ③ 「天保六年閏七月十四日、足助小出権三郎宛本屋久兵衛書状」(県史西三河所収)

- ④ 「六月七日、小出宛本屋久兵衛覚書」(買取)(県史学芸所収)
- ⑤ 「弘化四年五月六日、小出宛文教堂保兵衛覚書」(県史西三河所収)
- ⑥ 「十月、小出権三郎宛宮町味岡屋久二郎覚書(貸本)」(県史西三河所収)

- ⑦ 「七月十一日、小出権三郎宛永楽屋東四郎覚書」
- ⑧ 「七月七日、小出権三郎宛永楽屋東四郎覚書」
- ⑨ 「卯十一月廿三日、小出権三郎宛永楽屋東四郎覚書」
- ⑩ 「十月廿七日、足助権三郎宛永楽屋東四郎覚書」
- ⑪ 「未六月四日、永楽屋東四郎、御代中宛小出権三郎覚書」(買取)
- ⑫ 「六月廿七日、小出権三郎宛永楽屋東四郎覚書」
- ⑬ 「未十二月廿一日、小出権三郎宛永楽屋南店覚書」(県史学芸所収)
- ⑭ 「八月廿日、小出宛永楽屋和助覚書」(同)
- ⑮ 「五月十二日、小出権三郎宛美濃屋伊六覚書」

以上から、小出家と取引のあった名古屋書肆は①本屋久兵衛②文教堂保兵衛③永楽屋東四郎④永楽屋和助⑤永楽屋南店⑥美濃屋伊六⑦味岡屋久二郎(貸本)の七書肆である。

天保七年(一八三六)小出家「名府諸色留」には「一本久、安井久兵衛、子越次郎」との記載があり、名古屋に買い物をする時の書肆名に本屋久兵衛をあげている。また、天保十二年江戸出府中の「諸色買物記」には、三月朔日に「江戸大絵図」「町鑑」「和漢年代記」「万代宝鑑」を日本橋の須原屋茂兵衛で購入し、六月には、『泰平年表』『殿居囊』『青標紙』を上野御成小路の本屋で購入している。

(四) 三河吉田藩御用達松坂家(現豊橋市)と名古屋書肆

三河吉田藩御用達の松坂家にも、尾張書肆との関係史料が残され

ている。史料の宛名になっている松坂幸左衛門(八十八)は、吉田藩御用達で松坂家六代重賜である。松坂家は父である五代重穆が寛政三年(一七九一)に初めて吉田藩御用達になった。文化六年(一八〇九)に二連木から田中新田(現、豊橋市牛川町)に移住した。重賜は、文化二年生まれで、文化十三年に父が死ぬと家督、幸左衛門と称した。文政元年(一八一八)に四人扶持、同六年苗字帯刀許可、同八年五人扶持、同十二年六人扶持、天保六年(一八三五)八人扶持、弘化二年(一八四五)御家来並小役人以上格となり、嘉永六年(一八五三)二月に通称を八十八と改めた。安政二年(一八五五)十人扶持、同六年十二月、通称を兵左衛門と改めた。元治元年(一八六四)に吉田藩御用達の最高位の御代官格となっている。明治二年(一八六九)に家督を嫡子重澄に譲って隠居したが、翌三年七月、六十八才で死去した。

重賜は、和歌、漢詩、花道に通じており、和歌は岩上登波子、詩は中島宗隠門で、重賜詩歌集(詩九十篇、和歌百二十七首)があり、諸種の書籍を写したものの数十冊を残している。(以上、藤井隆「吉田藩御用達松坂重賜日記について」豊橋美博研究紀要九号)『松坂家蔵書目録』の文久三年改の蔵書数は、「和書」歴史軍書四十三部五百九冊、歌書二十四部百八十四冊、和文十部百十九冊、詩集文集之類二十一部百七冊、雑二百四十八部九百十冊、総計三百四十四部千八百二十九冊。「仏書」八部二十四冊、「異朝(漢籍)」経書五十一部五百二十九冊、子類十八部百十三冊、史二十九部四百二十二冊、文八部七十一冊、詩二十九部百二十四冊、雑五十部四百七十六冊、総計百八十五部、千七百十五冊、「和漢仏」総計五百三十三部、三千五百六十八冊という膨大な書籍数である。

松坂家文書中の名古屋書肆との関係をみることでできる史料表題は、以下のものである。

- ① 「卯十二月十七日 松坂八十八宛皓月文助覚書」(県史学芸所収)
 - ② 「七月二十七日松坂幸左衛門宛皓月文助覚書」(同)
 - ③ 「卯益前 松坂八十八宛皓月文助覚」(同)
 - ④ 「五月十日 松坂八十八宛皓月文助」(同)
 - ⑤ 「未十二月松坂八十八宛皓月文助」(同)
 - ⑥ 「未益前 松坂八十八宛(皓月文助)」(同)
 - ⑦ 「三月二十日 松坂幸左衛門宛風月孫助」(同)
- 以上、松坂家と取引の確認できる書肆は、①皓月堂文助②風月堂孫助の二書肆である。

(五) 羽田文庫旧蔵『手向草』藤屋儀助挿入書状

三河羽田八幡宮神明宮神主で、本居大平・平田篤胤門人の羽田野敬雄が、創設した「羽田文庫」旧蔵の『手向草』がある。『手向草』は、賀茂真淵の十三回忌追慕歌集で、本居宣長の意を受けて、名古屋の田中道麿蔵板で天明二年(一七八二)に刊行した。取次所は、伊勢松坂「柏屋兵助」、名古屋の「伊勢屋忠兵衛」である。羽田文庫旧蔵の『手向草』に、以下の書状が挿入してあった。

「十一月五日、鈴木土佐宛藤屋儀助」

追啓

一手向草出版仕候、二部指上申候、御買上可被下候、外二巻部乍御世話様植田栄作様へ御届ケ可被下候、メ三部指上申候、巻冊二付、代三匁五部宛二御座候、御弘メ可被下候、奉願上候、以上

十一月五日

藤屋儀助

鈴木土佐様

鈴木土佐は、天明四年に本居宣長に入門した、三河吉田熊野神社神主の鈴木梁満である。植田栄作は、吉田札木町の吉田藩御用達で賀茂真淵門人植田義方(七三郎)か。藤屋儀助は名古屋伝馬町九丁目の書肆である。刊記には確認できない書肆であるが、田中道麿の意を受けて刊行後、早速、鈴木土佐と植田栄作に送り、宣伝を依頼している。

(六) 三河と名古屋書肆

以上、三河に営業に入っていることを確認できる名古屋書肆を整理してみると

(碧海郡堤村、現豊田市、村上家)

- ① 永楽屋東四郎② 菱屋藤兵衛③ 美濃屋清七④ 松花堂⑤ 美濃屋伊六⑥ 皓月堂文助の六書肆。

(刈谷、現刈谷市太田家)

- ① 慶雲堂東平② 永楽屋東四郎③ 永楽屋佐助の三書肆。他に、名古屋書肆唐本屋勘右衛門売払幹旋を吉川弘道。書画の幹旋を名古屋の書家尾頭中書。書画表装を表具師東月堂幸八。

(足助、現豊田市、小出家)

- ① 本屋久兵衛② 文教堂保兵衛③ 永楽屋東四郎④ 永楽屋和助⑤ 永楽屋南店⑥ 美濃屋伊六⑦ 味岡屋久二郎(貸本)の七書肆。

(吉田、現豊橋市、松坂家)

- ① 皓月堂文助② 風月堂孫助の二書肆。

(吉田、現豊橋市、鈴木土佐)

① 藤屋儀助

三河は名古屋に近い西三河の村上家、太田家、小出家には、多くの名古屋書肆が営業に入り、激烈な競争状態であることが理解でき

る。名古屋から離れた東三河の松坂家や鈴木土佐家にも、名古屋書肆が営業に入っている。今後の調査次第で、さらに名古屋書肆の営業が発見できるかもしれない。この他、太田家の書画の表装に名古屋の表具師東月堂幸八が入っている。

三河に営業に入った書肆をまとめると①永楽屋東四郎②菱屋藤兵衛③美濃屋清七④松花堂⑤美濃屋伊六⑥皓月堂文助⑦慶雲堂東平⑧永楽屋佐助⑨本屋久兵衛⑩文教堂保兵衛⑪永楽屋和助⑫永楽屋南店⑬味岡屋久二郎(貸本)⑭風月堂孫助⑮藤屋儀助の十五書肆を確認することができる。

三 高山国学者富田礼彦と尾張書肆美濃屋清七

豊田市村上家文書の村上忠順へ宛てた書状の中に、富田礼彦からの書状が残されている。出版や和歌の交歓などが記され、名古屋書肆美濃屋清七の名が出てくる。高山市郷土館に富田家文書が残されており、以下、その調査から概要を明らかにしておく。

富田礼彦は、幕府高山代官所の地役人である。文化八年(一八一二)に二十五俵三人扶持、天保十四年(一八四三)に頭取役、明治元年(一八六八)八月高山県判事となる。明治二年二月、梅村騒動に関わって自殺未遂。このため閉居謹慎となり、同年三月に判事御免となっている。国学を高山の本居宣長門人田中大秀に学び、他方漢詩もよくした。国学は、三河の村上忠順と交友が深く、漢詩の場合には「富田節齋」と称し、尾張の森春濤と交友が深かった。富田家文書には、森春濤添削の漢詩が多く残されている。

富田礼彦は、高山で和歌や国学の門人、吉嶋斐之、川上尋寿、南城頼雄、都竹甕雄、安保邦彪、桑原千町、堀通緒、瀧原遠音等と月

次会を行っている。

富田礼彦の「公私日記」を見ると、高山の富田礼彦の所や、さらに飛騨古川方面へ、名古屋書肆美濃屋清七が、屢々営業で訪問していることがわかる。書物の売買の外、三河の村上忠順との書状や書物、物品の交換を担っている。また、富田礼彦が名古屋を訪問した時には、礼彦を三河碧海郡堤村の村上忠順宅に案内もしている。以下、「公私日記」に出てくる、美濃屋清七関係記事を列挙しておく。

富田礼彦「公私日記」

文久三年三月晦日「名古屋本町十丁目美濃屋清七相越候間、左之通相認、桂花余香、三時山水帳、竹洞□神祇□□」

文久四(元治元)年三月二十八日「名古屋美濃屋清七相越」

同年七月二十七日「尾州名古屋美濃屋清七相越、明日古川へ相越度段申出候付、大の彦左右衛門、蒲八十松其外転書遣」

同年七月晦日「三州刈谷藩村上承卿へ書状相認、短冊三拾式葉、野へのうつら四卷、詠歌三百首相認、金百疋、一位硯箱一面相添、玉藻集へ詠歌加入頼遣候事」

同年八月二日「名古屋美濃屋清七相越」

(富田礼彦「野辺のうつら四」挿入張付)

「三州刈谷藩 村上承卿忠順

春歌百首、夏歌六十六首、秋歌六十一首、冬歌九首、恋歌十一首、雑歌六十一首

合歌数三百八首、外皇国詠史短冊三十二葉

右元治元年八月朔日、尾州名古屋美濃屋清七へ渡」

同年十月十四日「尾州名古屋美濃屋清七相越、三州村上承卿より書状相届候事、三州刈谷村上承卿より書状并出雲国造より承候由二而

桜の林（千家尊澄、安政三年刊）壹冊差越」

同年十月十五日「昨十四日昼より詠歌六百首、昨夜中も取懸り、今朝平明より夜五ツ時迄ニ写切、村上へ詠歌史集頼遣し候事、三州刈谷村上承卿へ書状、金百疋、春慶塔盆壹ツ、詠史六百首、右封込美濃屋清七江届方頼遣候事」

元治二年四月二日「尾州名古屋美濃屋清七相越」

同年四月三日「三州碧海郡堤村村上忠順へ書状、尾州名古屋森春濤へ書状、美濃屋清七、野村屋庄助」

同年十二月二十日「三河国村上承卿へ書状相認、かしのふる葉下巻冊、虚無僧詩、南城蓄髪賀、米寿賀歌、煌丸石、しのふ石、雪車図、療図、諸子短冊、尾州名古屋美濃屋清七江本代金壹両壹分壹朱、□銀貳□五□、右江村上行き状包頼遣」

慶応元年三月十四日「美濃屋清七案内二而、三河国碧海郡堤村別荘村上承卿へ相越、止宿」

慶応三年七月十七日「尾州名古屋本町拾丁目美濃屋清七より麓のちり三冊、虚字啓蒙詩用虚字一冊、詩法掌韻大成三冊、右便三州村上承卿より」

四 信州松本書肆高美屋甚左衛門と尾張書肆

嘉永二年（一八四九）年に名古屋小牧町の美濃屋伊六から刊行された豊田利忠著『善光寺名所図会』は、高美屋常庸の協力によって著述された。このため、書中挿絵に高美屋の店頭の様子が描かれており、発行書林に「信州松本本町、高美屋甚左衛門」が加わっている。こうした名古屋と松本の結びつきから、松本の高美屋史料に名古屋書肆に関する記述がないか調査した。

信州松本の書肆高美屋甚左衛門は、寛政九年（一七九七）年、初代常庸が十四才で創業した。寛政十一年十六才の時に、伊勢・大和・播磨路を旅したついでに、京・大坂において初めて自身で仕入れを行っている。以後、「毎度江戸名古屋表へ仕入二行、近年学ひの道大にひらけ而、先ハ此市中に予が店、書肆一家を成せり」と記している。高美屋の仕入先が江戸と名古屋としているが、文化四年（一八〇七）二十四才の時、高美屋常庸は病氣保養のため、名古屋に逗留している。四月八日に松本を発足して、八月まで名古屋小牧町の笹屋伝蔵方に偶居して治療しており、名古屋とは密接な関わりがあった。（『萬曆家内年鑑』）現在、高美家には『高美常庸日記』が残されており、そこに、名古屋書肆との取り引きや交流が記録されている。以下、関係部分を摘出する。

文化十二年七月十三日「名古屋『本町七丁目』永楽や東四郎『書林』書状着」

同年七月二十五日「尾州本町三丁目、ひしや久八『狂歌師右馬耳風』親尋来る」

同年九月二十三日「今日、名古屋より常助来る、（略）是ハ名古屋本町書林風月堂孫助方へ勤する人（略）此方へ手前方風月の帳合并ニ善光寺詣」

文化十三年七月八日「尾州書林永楽其外勘定金子登せる」

文化十四年十二月十日「名古屋や永楽や手代、江戸より帰路入来、店之事種々かけ合」

文政二年四月朔日「名古屋や永楽や藤助主、藤屋宗助主入来」

同年七月七日「名古屋扇半登り二所々金子誂へ遣ス」

天保三年八月朔日「今日、名古屋永楽や手代、大坂柏原や、秋田や

手代衆、江戸より帰路之由立寄、各々書林也」

天保六年五月二十九日「名古屋本屋久兵衛手代平二郎主来」

嘉永六年三月三十日「大坂秋田や太右衛門主手代平助丈、名古屋永楽屋東四郎主手代宇助丈兩人二而、江戸帰り立寄勘定調へ」

以上、高美屋と取引の確認できる名古屋書肆は①永楽屋東四郎②風月堂孫助③藤屋宗助④扇半（扇屋半右衛門）⑤菱屋久八⑥本屋久兵衛の六書肆である。また、前記『善光寺名所図会』の刊行が美濃屋伊六、発行書肆に、高美屋甚左衛門の他、美濃屋清七も加わっている。この、美濃屋伊六と美濃屋清七を加えると八書肆が、信州松本の高美屋に関わっていた。

五 奥州信夫郡瀬上宿（福島市）内池家と永楽屋東四郎江戸店

旧尾西市歴史民俗博物館が、尾張中島郡祖父江の国学者小塚直持の特別展を開催した際、奥州の本居大平門人の内池永年の日記を紹介して、直持と永年の交流のあることを明らかにしていた。本居派の国学者であれば、宣長の名著『古事記伝』をはじめ、多くの宣長著書を集書しているはずである。そしてそれらの多くが名古屋の永楽屋東四郎から出版されている。内池文書中に名古屋国学者や書肆の関係史料を探してみた。内池家文書は『福島市史料叢書』第五十輯第五十八輯で、基本的なものについて翻刻している。以下、内池関係史料はこれによっている。

（一）内池家と国学

内池永年は、文化九年（一八一二）に本居大平に入門した。寛文十二年（一七六二）生まれなので、五十才での入門である。尾張では、永年が入門した翌年に植松茂岳（当時は小林慶作繁樹、後植松

有信に養子）が本居春庭に入門している。大平にも入門しているが、入門年月日は不明である。中島郡祖父江の小塚利蔵直持も大平に入門している。小塚直持は、本居宣長門人で尾張藩七百石の横井千秋（十郎左衛門）家の領地（在所）屋敷に仕えていた。

内池家は近江出身の商人で近江屋を屋号としていた。奥州信夫郡瀬上宿で呉服商を基本に酒造醬油味噌水油材木質業等を行い、他方、田畑を集積して地主経営も行った。また、享和元年（一八〇一）に備中足守藩木下家（三万石）が、奥州信達二郡内に二万石余の飛地を与えられ、瀬上陣屋で支配すると、足守藩御用達となる。この翌年、内池永年は四十才で隠居し、家督を養子延年に譲った。内池家は当主が与十郎を名乗り、隠居すると惣重郎を称した。永年は、隠居後に賀茂季鷹門人で江戸の橘千蔭などと交わった安田躬弦に和歌を学び、文化九年に本居大平に入門し、地域の国学結社「みちのく社中」を組織した。「みちのく社中」は、内池永年・石金音主を指導者とし、瀬上と桑折に居住する大平門下等二十数名の会である。永年は和歌山の本居大平を尋ねた文政二年（一八一九）の紀行「道のしをり」が残されている。三月二十九日、大平の指示で宿舎にした和歌山本町四丁目の直川屋七兵衛には、「此家二同門衆泊被居候、名古屋材木町天満や九兵衛隠居、河村秋輔、古翁門人也、同中島郡祖父江村小塚利蔵直持、兩人此度師家へ入門ニ参候由也」と記している。永年は、和歌山の旅宿で名古屋の河村秋輔や小塚直持に出会っている。河村秋輔は、寛政元年（一七八九）年に河村九兵衛正雄の名で、植松有信等と本居宣長に入門しており、永年と会った時は六十六才で翌年三月に死去している。小塚直持は、二十三、四才の頃である。文化十一年五月十八日着の本居大平書状には、「三河国吉田中山美

石、俗称ハ中山弥助と申候」と記している。中山美石も本居大平門人で、後に三河吉田藩校時習館教授となった。著書に『後撰和歌集新抄』があり、文化十一年暮秋（九月）に永楽屋東四郎から刊行している。永年は、この情報を得て、大平に美石について尋ねたのであろう。

植松茂岳についても永年は知っていた。本居大平宛書簡下書で「小林茂岳主之著作天説弁ト云書、冲安海より借受写取候、此書三大考玉御柱之辟説をヲ看破し誠ニ面白クか、れたる書と被思候」と茂岳の「天説弁」を高く評価している。文政四年に死去した大平の次男清島から永年と石金音主（佐次兵衛）に宛てた書状では、茂岳について「此小林啓作茂岳ト云ハ一名古屋人ニテ、当春父上京ノ節京へ参り来り、始終父ニ隨身していせへも行、サテ又若山へ来り、五月より十月末迄若山ニテ留学いたし居申候、若き人ナレド、甚古学執心出精ノ人也、サテ十月末ニ小子ト同道上京いたし、京より国へ帰り行申候、又上京もして若山へも来ル積リニ御座候事也」と紹介している。茂岳は大平に入門した天保十年ころから和歌山に遊学し、文化十二年末に名古屋に帰った。「天説弁」は和歌山遊学中の二十二、三才頃の著作である。清島は永年に「名古屋在ノ彼御存ノ小塚利蔵よりも、をりをり文通御座候、不絶勤学致居申候様子ニ御座候」と、小塚直持の勤学ぶりも伝えている。奥州の内池永年（みちのく社中）と尾張の植松茂岳、小塚直持等の本居門下とは、同門ということを知り合う関係にあった。

内池永年は、本居大平門人として多くの蔵書を収集した。現在、文政九年十月改の「内池家蔵書目録」が残されている。内容ごとに分類されている。①国史類、十四種②神書類、十種③雑史類、四十

種④有職類、十種⑤氏族類、十八種⑥字書類、十九種⑦往来・法帖類十九種⑧物語類、十一種⑨草子類、四種⑩日記・紀行類、十一種⑪撰集類、十七種⑫私撰類、二十八種⑬歌学類、二十八種、⑭詩文類、十五種⑮医書類、四種⑯教訓類、八種⑰釈書類、十五種⑱謡曲類、八種⑲地理類、二十一種⑲名所類、三種⑳随筆類、十四種㉑雑書、三十九種㉒俳諧書類、十三種㉓漢籍類、二十六種㉔歌学類、四種㉕雑書類、二種㉖雑史、二種、総計四百六十一種となっている。

（二）永楽屋東四郎と江戸店

内池家蔵書が、どのようにして集書されたか興味深い。前記、植松茂岳の「天説弁」のように、伊勢白子の本居大平門人冲安海に借りて写したというように、知友に借りて写本にしたものもある。しかし、基本は書肆からの購入であろう。蔵書中の本居宣長の『古事記伝』『玉勝間』『神代正語』『出雲国造神寿後釈』『玉くしげ』等は、名古屋の永楽屋東四郎の刊行である。そのような視点で、内池家史料を見ると、天保十一年三月二十日から翌年三月五日にかけての十一通の内池（近江屋）惣重郎（永年）宛の「永東丈助」の書状（県史学芸所収）が興味深い。

- ①天保十一年三月二十日「近江屋惣重郎宛永東丈助」
- ②天保十一年四月十日「近江屋惣重郎宛永東丈助」
- ③天保十一年八月朔日「内池惣重郎宛丈助」
- ④天保十一年八月二十四日「内池惣重郎宛永東丈助」
- ⑤天保十一年九月二十八日「近江屋惣重郎宛永東丈助」
- ⑥天保十一年十一月十六日「内池惣重郎宛永東丈助」
- ⑦天保十一年十二月一日「内池惣重郎宛永東丈助」
- ⑧天保十二年閏一月六日「内池与重郎・同宗重郎宛永東丈助」

⑨ 天保十二年一月十日「内池惣重郎宛丈助」

⑩ 天保十二年二月四日「内池宗重郎宛永東丈助」

⑪ 天保十二年三月五日「内池惣重郎宛永東丈助」

永楽屋東四郎は、名古屋の外に江戸と大垣に出店を置いた。一例をあげると、「天保十五年九月再校」の本居宣長『古事記伝』「付目録・三大考」の刊記は、「尾州名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎、江戸日本橋通本銀町 同出店」となっており、永楽屋東四郎の江戸出店が江戸日本橋通本銀町にあった。また、平井直之著の『嘉永四年辛亥晴雨考』の「表紙見返広告」には、「本店 尾州名古屋本町通七丁目永楽屋東四郎」「尾州出店 江戸本銀町二丁目永楽屋丈助」となっている。内池永年に宛てた「永東丈助」というのは、永楽屋東四郎の江戸店である。したがって、内池永年の書物購買の一つの流れが、永楽屋東四郎の江戸店であったことがわかる。取り引きが行われた天保十一年から十二年は、内池永年七十八才から七十九才である。書状中、天保十二年閏一月六日は「内池与重郎・同宗重郎」宛の連名になっている。「与重郎」は養子の「延年」、「宗重郎」は「永年」である。「延年」は、翌天保十三年六月に五十六才で死去している。永年は七年後の嘉永元年に八十六才で死去する。天保十一年、十二年は、永年の最晩年に当たり、内池家にはすでに、大量の蔵書があったと思われる。その集書の経緯はわからないが、その上での永楽屋東四郎江戸店との取り引きである。他方、永楽屋東四郎の江戸店の存在は知られていたが、その営業実態を示す史料は、是までなかったため、極めて貴重な史料だといえる。

六 尾張外著者の名古屋出版

名古屋書肆が、尾張以外に三河、信州松本、飛騨高山、奥州瀬之

上等に展開していることを明らかにした。以下、名古屋書肆の関係出版について列挙する。

(三河著者)

① 村上忠順『散木弄詞集標柱』四冊、嘉永三年序、三河新堀 深見藤吉蔵板、発行書肆 京都、出雲寺文次郎、田中屋治兵衛、江戸、山城屋佐兵衛、須原屋佐助、岡田屋嘉七、大坂、河内屋喜兵衛、河内屋和助、紀州若山駿河町、坂本屋喜一郎、尾州名古屋本町四丁目 永楽屋正兵衛。

② 村上忠順『詠史河藻歌集』二冊、文久二年、松嶋亭(深見)・晴月堂蔵板。

発行書肆は、尾州名古屋本町四丁目晴月堂卯兵衛、その他は①と同じ。

③ 村上忠順『元治元年千首』慶応二年序、新堀深見藤吉蔵板、その他は須原屋佐助を除き②と同じ。

④ 村上忠順『類題和歌玉藻集』二編全三冊、尾陽書林片野東壁堂(永楽屋) 梓(村上天帯封)

⑤ 中山美石『後選和歌集新抄』十五冊、文化十一年、片野東四郎(永楽屋)、京都風月庄左衛門、東都前川六左衛門、浪華森本太郎。

⑥ 岩上登波子(大平門人)『三代調類題』六冊、文政五年跋、永楽屋東四郎刊。

⑦ 「とはこ詠草」全三冊 岩上登波子 文久元年辛酉新刻 尾張皓月堂梓(村上天帯封)

⑧ 鶴田卓池『橋日記』一冊、寛政十年、永楽屋東四郎刊。

⑨ 鶴田卓池『花洛集 秋拳追善』一冊、文政十年、菱屋久兵衛刊。

⑩ 卓池の古稀賀集『竹春集』、天保八年九月跋、名古屋玉蟾堂板(京町、中村屋治助、彫刻師)

①曙庵秋拳編『安居鐘』（士朗の十三回忌追善集）、文政七年、本屋久兵衛刊。

②宣彦編『はなのわたり』（秋拳一周忌追福句集）、文政十年序、本屋久兵衛刊。

⑬『曙庵（秋拳）句集』、弘化四年序、万卷堂（菱屋久八郎）刊。

⑭岡崎荻洲親卿・金沢子匹著『萃水奇賞』、寛政三年、岡崎連尺町扇屋伝左衛門、永楽屋東四郎刊。

⑮梅ヶ坪（現豊田市）太田益延…道貴編『三河衣乃里艶桜和歌集』、和歌集所、岡崎伝馬町樋口与次右衛門、名古屋伝馬町文教堂保兵衛。

⑯松本奎堂『奎堂文稿』、明治四年、尾張奎文閣梓（永楽屋正兵衛）（飛驒高山）

①田中大秀『養老美泉弁』一冊、文化十二年序、永楽屋東四郎刊。発行、京都蛭子屋市右衛門、大坂奈良屋長兵衛、江戸前川六左衛門、飛驒高山二之町鍵屋与六郎。

②田中大秀『竹取翁物語解』六冊、天保二年、名古屋松屋善兵衛刊、発行、江戸須原屋伊八、京都植村藤衛門、大坂河内屋喜兵衛・河内屋太助、尾州名古屋本町十丁目松屋善兵衛。

（参考）

村上忠順『類題和歌玉藻集』初編全三冊、若山書林野田世寿堂梓、印「紀州若山野田世寿堂阪本屋喜一郎製本発兌」（村上前帯封）

以上、三河、高山の著者の刊行に關係した名古屋書肆は①永楽屋正兵衛（四）②晴月堂卯兵衛（二）③永楽屋東四郎（五）④皓月堂文助（一）⑤菱屋（本屋）久兵衛（三）⑥文教堂保兵衛（一）⑦松屋善兵衛（一）の⑧万卷堂（菱屋久八郎）⑨玉蟾堂（中村屋治助）の九書肆である。著者としては、三河では国学・和歌の村上忠順（四）

中山美石（二）岩上登波子（二）太田益延・道貴（一）と、俳諧の鶴田卓池（三）中島秋拳（三）關係が中心である。国学・和歌は、永楽屋東四郎、俳諧は、菱屋久兵衛と菱屋久八郎が、刊行の主軸となっている。

七 名古屋書肆の営業展開

これまでは、名古屋書肆の営業展開を、書籍を購入した地域や家ごとにみてきた。ここでは、書肆ごとにどのような展開をしているか整理しておきたい。

（一）永楽屋東四郎、本町七丁目、出版、古本、製墨、製葉

①服部家②吉田家③岩田家④下郷家⑤村上家⑥太田家

⑦小出家⑧松本高美屋

（二）風月堂孫助、本町一丁目、出版、古本、貸本、製墨

①下郷家②松坂家③松本高美屋

（三）美濃屋（本屋）清七、本町十丁目、出版、古本、貸本、葉

①服部家②村上家③高山富田家

（四）美濃屋（本屋）伊六、小牧町、出版、貸本、書画、葉

①村上家②小出家

（五）菱屋藤兵衛、本町三丁目、出版、古本①吉田家②村上家

（六）菱屋（本屋）久兵衛、本町九丁目、出版、古本、貸本

①小出家②松本高美屋

（七）菱屋（本屋）久八郎（万卷堂）、伝馬町五丁目、出版

①吉田家②松本高美屋

（八）永楽屋佐助（東明堂）、末広町①吉田家②太田家

（九）皓月堂（井筒屋）文助、幅下樽屋町、出版、古本、貸本

①村上家②松坂家

- (十) 藤屋吉兵衛、本町七丁目、出版①下郷家
- (十一) 本屋治兵衛(不明、本町十二丁目、角屋治兵衛か)

①服部家

- (十二) 松花堂(不明、文化十二年加藤足彦『文音親友録』刊行、松華堂か)①村上家

- (十三) 慶雲堂(万屋)東平、本町十丁目、出版、古本、貸本①下郷家②太田家

- (十四) 永楽屋和助、本町九丁目、出版、古本①小出家

- (十五) 藤屋宗助、裏門前町(飴屋町)、古本①松本高美屋

- (十六) 藤屋儀助、伝馬町九丁目①鈴木土佐家

- (十七) 扇半(扇屋半右衛門、崇高堂)、岡田新川『文字竅』等出版①松本高美屋

①松本高美屋

- (十八) 文教堂(藤屋)保兵衛、宮町三丁目①小出家

- (十九) 永楽屋南店、文房具①小出家

- (二十) 永楽屋丈助(永楽屋東四郎江戸店)、江戸日本橋通本銀町二丁目①奥州内池家

- (二十一) 大野屋惣八、長島町五丁目、貸本、古本、出版①服部家
- (二十二) 本屋仙三郎(貸本)、(不明)①野口家

- (二十三) 味岡屋久二郎、宮町坂口北側、出版、貸本①小出家

- (二十四) 表具師東月堂幸八(軸装)、伝馬町①服部家②太田家

- (その他三河出版)

- (一) 永楽屋正兵衛、本町四丁目、出版

- (二) 晴月堂卯兵衛、本町四丁目、出版、古本

以上、書籍を買ったり、借りたりした側の史料で確認できる

二十三の書肆と表具師一、また三河著者の出版に関わった、前記書肆以外の二書肆を見た。これらの書肆の経歴や出版書については、太田正弘『尾張出版文化史』と岸雅裕『尾張の書林と出版』に詳しい。

名古屋書肆で最も多くの書籍を刊行した、永楽屋東四郎が、尾張、三河、松本、江戸等、多くの手代を派遣して、最も積極的な営業活動をしていることがわかる。営業が確認できる書肆で、太田、岸両書に出てこない書肆が(八)の永楽屋佐助(十二)の本屋治兵衛(十二)の松花堂(十九)の永楽屋南店(二十二)の本屋仙三郎である。前記二書に「角屋治兵衛」「松華堂」の名があるので本屋治兵衛は「角屋治兵衛」、松花堂は「松華堂」かとも思われるが、どちらも住所等詳細が不明である。永楽屋南店は、史料から覗の販売を行っていたことがわかる。永楽屋東四郎の文具店であったように思われる。本屋仙三郎は、貸本屋で野口家は明治二年正月十二日に二匁の西国順霊十冊、一匁五分の木石余談六冊を借り、二月二十七日に返却。二月二十七日に二匁の俊傑神稲水滸伝十冊、一匁の安土問答諺注五冊、一匁五分の鎗権三郎六冊を借り、四月十四日に返し、四月十四日にまた借りる等々、月一回程度、各家々を廻り貸本営業をした店のようである。永楽屋佐助は、尾張で野口家、三河で太田家に見られ、太田家では、多数の永楽屋佐助の営業書状、覚があり、頻繁に取引を行っていた。印記から、住所は名古屋末広町で「東明堂」となっている。

おわりに

本稿は、従来、名古屋書肆の刊行著作や刊行目録等を明らかにし

てきた経緯を踏まえ、書籍を買ったり借りたり、著作を出版しようとした人々の家に残された史料を調査収集し、整理したものである。近世地方史料が残存しているのは、藩や旗本等の領主の家計に関与し、領主の御用達になった家が多い。こうした家の当主は、営業活動とともに、豊かな経済力を背景に儒学、国学、漢詩、和歌、俳諧、狂歌、書画、音楽、茶道、囲碁等の幅広い文化活動を行った。このため、多くの書籍の購入をしたり、自分の著作の出版や、師家の出版の経済援助等を行った。本稿が対象とした、尾張の服部家、下郷家、三河の太田家、小出家等すべてこのような家である。刈谷藩の御用医師の村上忠順も、その出版と書籍購入には、国学の弟子で娘婿の富商深見家が深く関与していた。

名古屋書肆は、化政期に約三十数軒程営業していたといわれている。代表的な書肆は、本稿でも出てきた永楽屋東四郎、風月堂孫助、美濃屋伊六、菱屋久八郎等と貸本屋大野屋惣八（大惣）である。江戸や上方の書肆と競争や提携をしながら、営業実績をあげる努力をしないと、すぐに衰退や廃業ということになる。実際、衰退・廃業した書肆も多かった。名古屋城下に店を構えて、客の来るのを待つような営業形態では、生き残りはむつかしく、積極的に買手、得意先を求めて営業をする必要があったと思われる。名古屋きっての大手書肆永楽屋東四郎の営業活動をみればその激烈さは理解できる。まして中小書肆は、なおさらであつたらう。狙い目は、文化活動を行い財力を持った豪商、豪農であつた。その営業範囲は、今回明らかにしたかぎりでも、名古屋城下を越えて、尾張や三河、飛騨高山、信州松本、江戸、奥州に競合しながら展開した。こうした関係で美濃・伊勢等々の史料を見直せば、さらにその実態は詳細に明らかに

なると思う。また、今回は紙幅の関係で割愛した、売買や貸借された書籍の内容については、蔵書や、書籍目録を含めて別稿で明らかにしたい。